

1 1 . 土砂災害防止に関する広報活動

(1) 土砂災害防止月間の取組

毎年6月は「土砂災害防止月間」です。毎年、全国各地で土石流、地すべり、がけ崩れ等の土砂災害が多発する状況を踏まえ、土砂災害防止に対する住民の方々の理解と関心を深めるとともに、防災知識の普及、警戒避難体制の整備促進を通じて、土砂災害による人命、財産の被害を防止することが、この月間の目的です。

本県ではその広報のため、土砂災害の防止を普及・啓発するチラシの配布、小・中学生を対象とした「土砂災害防止に関する絵画・作文」の募集及び作品展示、鶴丸城御楼門のライトアップを活用した啓発、テレビ・ラジオでの職員自身による広報等、様々な活動を行っています。



鶴丸城御楼門の
ライトアップ

令和3年度土砂災害防止に関する作文

【小学生の部】国土交通事務次官賞

「がんばれ、さぼうダム」

鹿児島県 南九州市立大丸小学校 1年 末永 和心さん

5がつに、1ねんせいから4ねんせいまでいっしょに、さぼうダムのこうじげんばのけんがくにいきました。さぼうダムにいくのは、はじめてだったので、どんなところかなあ、おみせみたいところかなあとおもいました。

さぼうダムにつくと、さぎょうふくをきたおじちゃんたちが6にん、にこにこわらいながらまわっていました。「さぼうしていち」とかいてあるかんぱんのまえで、おはなしをしてくれたおじさんが、「だれのおとうさんか、わかる。」と、わたしにはなしかけてきました。

マスクをつけたおじさんのかおをみて、ほいくえんでいっしょのクラスだったそうたくんのおとうさんだとわかりました。

そうたくんのおとうさんにあんないされて、わたしたちは、さぼうダムのすぐちかくまであるいていきました。さぼうダムは、とてもおおきくて、どっしりしていました。

「このこうじがはじまったころに、そうたがうまれたんだよ。」

と、おじさんはおしえてくれました。あかちゃんだったわたしたちも、いまでは1ねんせい。さぼうダムのこうじというのは、ながいねんげつがかかるんだなあとおもいました。

ダムのうえのほうには、たかいきがたくさんありました。おおあめがふって、どしゃくずれがおきたり、きがたおれてきたりしたときに、このダムが、まもってくれるんだとおもったら、ちかくにいったでなでなでしたくなりました。

7がつに、しずおかけんのあたみしというところで、「どせきりゅう」さいがいがおこりました。テレビのニュースで、ちゃいろのつちが、かわのようにながれてくのを見ました。そして、そのつちのかわは、はやいスピードで、いえやくるまをおしながしていきました。

あつというまに、おおきないえやくるまが、つちのなかにのみこまれていくのを見て、びっくりしました。あんなにかんたんにながされていくなんて、こわいなあとおもいました。

たくさんひとがなくなったり、ゆくえふめいになったりして、かぞくのひとたちは、きっとかなしいだろうなあとおもいます。わたしは、だいすきなかぞくがとつぜんいなくなったら、かなしくてかなしくて、まいにちないているかもしれません。

「ひなんくんれんはしていたけど、まさか、ほんとうにさいがいがおこるとはおもっていなかった。」

と、インタビューされたしょうぼうだんのおじさんは、ざんねんそうにはなしていません。

さぼうダムは、わたしたちのいのちをまもるために、がんばってくれているのだとおもいます。あのさぼうダムのこうじがおわったら、またけんがくについて、おおきなこえでおれいをいいたいです。

令和3年度土砂災害防止に関する作文

【小学生の部】国土交通事務次官賞

「私にできること」

鹿児島県 薩摩川内市立東郷学園義務教育学校 5年 篠原 菜緒さん

「バリバリバリッ、ドッゴーン。」

7月10日の夜、私は毛布を頭からすっぽりとかぶり、ベッドの中で丸くなった。はげしい雷の音。暗いはずの部屋が、雷の音とともに、ぱっと明るくなる。その度に、となりで寝ている妹のことが心配になった。「早く朝にならないかな。」そう思いながら目を閉じていたら、朝になっていた。

「おはよう。」

寝不足気味で、ふらふらとリビングに向かうと、いつもと違う光景が目飛びこんできた。庭に大きな池ができていた。私があっけにとられてみると、あわただしく歩いてきた母が言った。

「おはよう。着替えて。部屋の片付けを手伝ってちょうだい。じいちゃんたちが、うちに避難して来るから。」

大雨で、川内川がはんらん危険水位をこえ、避難指示が出たそうである。私は、「避難」という母の言葉を聞いて、少し怖くなった。

しばらくすると、祖父母やいとこの家族がたくさんの荷物と共に、避難をしてきた。池になった庭には、仕事で使っているトラックなど、全部で6台もの車が止められた。いつもと違う様子に、私は少し戸惑ってしまった。

学校では、避難訓練の時に、東日本大震災のことを教えてもらったことがある。大きな地震と津波で、多くの人々が、大事な家や家族を失ってしまった。川内川がはんらんすると、多くの人が同じような経験をするかもしれない。私の家族もそうなるかもしれない。そんな不安が頭をよぎった。その時、父の言葉を思い出した。

「この家はね、土砂くずれや水害の心配のない場所を探して建てたんだよ。菜緒が生まれて2カ月も経たないうちに、あの東日本大震災が起きてしまったからね。」

父は、よくこの話をしてくれた。私は、自分の家で、家族を守ることができるのだと思うと少し安心した。そして、家族みんながそろうということは、こんなに心強いのだと感じた。

しかし、避難してきた祖父の顔は、元気がないように見えた。きっと自分の家のことが心配で仕方ないのだと思った。テレビでは、どのチャンネルも、大雨のことばかり伝えていた。

「大雨特別けい報、最大限のけいかいを。ただちに命を守るための行動を。」

そんな言葉が何度もくり返されていた。この言葉を聞くと、私はまた不安になった。しかし、このニュースのおかげで、みんなが「避難しないといけない」と思う。そして、川内川が本当にはんらんしたときに、命が助かるのであれば、大切なことだと思った。

また、ただ不安になっていても仕方がないと思い、

「私に、何かできることない。」

母にたずねた。それから、ご飯の準備を手伝ったり、いとこのお世話をしたりして過ごした。気付いたら夕方になり、川内川の水位も落ち着き、はんらんの心配もなくなった。私は、心の底からほっとし、体の力がぬけるような気がした。

「ありがとう。」

その言葉と共に、祖父母やいとこたちが、笑顔で帰っていった。

その日の夜は、となりでねむる妹の顔を見ながら安心してねむることができた。

私は、今回の経験で、災害の怖さを知った。その一方で、家族で一緒にいることの心強さも実感できた。災害はいつどこで起こるか分からない。その時に、最大限できる行動をとることや、もしものときのために、しっかり備えておくことが大切であると気付いた。そして何よりも、何も起こらない日常が一番幸せだと感じた。



令和3年度土砂災害防止に関する作文

【中学生の部】国土交通事務次官賞

「過去から学ぶ」

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 2年 松田 くららさん

私の祖母の家には、私と私の家族の写真が載った何年か前のカレンダーが貼ってある。そのカレンダーは、半分がふやけて茶色く汚れている。祖母になぜ汚れているのかと聞くと、

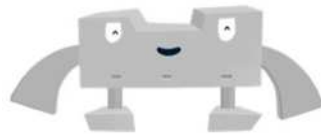
「まだくらが小さい時に家の裏の山が大雨で崩れた時に家が壊れて、その時に雨水、泥土が家の中まで入ってきて、その時にこのカレンダーのところまで泥が上がってきたんだよ。」

と教えてくれた。この茶色く汚れたカレンダーにはこんな物語が、刻まれているんだ、とすこし驚いた。いつだったか忘れたが、祖母がこの土砂崩れの事でテレビに出ていたことを思い出した。その時、私の母は私に

「おばあちゃんはね、この土砂崩れのせいで違う家にしばらく住んでてね、その後も家に入った泥を出したり家を直したり大変だったのよ。」

と教えてくれた。でも、正直私はまだ幼くてその時の記憶は全くと言っていいほど覚えていなかったため、そんなに土砂崩れのことについて深く考えたりはしなかった。しかし私が小学生の時に地図帳の1番最後のページを開くと全国で今まであった被害の大きかった自然災害のページを見つけた。その時私は、思わず息をのんだ。祖母の土砂災害にあった直後の家の上空から撮った画像が載っていたのだ。私は、この土砂災害のことについて詳しく知りたかったため、祖母に聞いてみた。ギンギンギー。2010年10月20日午後7時過ぎ、寝室にいた祖母は激しい雨音の向こうに何かがきしむような音を聞いた。「変だな。」山がある西側の窓を開けた瞬間、道向かいの民家の小屋が赤土の土砂に押しつぶされた。ぼうぜんとする祖母の耳に次の瞬間、ごう音が響いた。同時に家全体を衝撃が襲う。とっさに隣の居間に逃げ込んだ。大木や電柱が祖母のいた寝室の窓と壁をぶち破り押し寄せ、祖父母は外に出た。2階建ての家半分を赤い土砂と無数の大木が覆っていた。寝室は全体がひしゃげた。直撃を免れた部屋も濁流で水浸しだった。一夜明けた21日。祖父や私の父は家の片付けに追われたそうだ。家は、土砂崩れにあう4年前の3月に、祖父の退職金で建てた念願の新居だったそうだ。私はこの話を聞いてとてもショックだった。身内でこんな大変なことが起こっていたのに、何も知らずにのんきに過ごしていた私が憎らしくなった。祖父母は、この土砂崩れのあった家に今も住んでいるが、次また土砂崩れが起こるのか、誰にも分らない。私達が分かるのは起こる可能性は決してゼロではないということ。今年の夏に入ったばかりの頃、静岡県熱海市の伊豆山で土砂崩れが起きた。急な出来事だったので、私はとても驚いた。死者は現在26名だそうだ。事故直後は死者数よりも行方不明者の方がとても多かったが、日に日に行方不明者数は減っていき、死者数が増えていた。私は、もし奄美であった土砂崩れで祖父母が気づかずに逃げ遅れていたら今どうなっているのだろうか、と考えてしまった。

土砂災害というのは、起こる予兆なんてないし、どれだけの規模なのか、どこで起こるのか、そんなのは誰にも分らない。しかも、ここ日本は土砂災害の多さは世界から見ても多いそうだ。なぜ、ここ日本が土砂災害が多いのか調べた。結果は、日本は国土の7割が山地であるため、河川は急勾配で流れも速く、氾濫などが起きやすい地形だということ。また、活発な地殻変動によって複雑・不安定な地形・地質が形成され、温帯多雨という気象条件から、土砂災害が起こりやすくなっているそうだ。私達は、土砂災害を止めることは不可能だ。しかし、逃げることでならだれだってできる。命を守るためなら、全力で。そのためには、安心・安全に逃げることを最優先するのが鉄則だ。さらに、普段からハザードマップで避難場所を確認するといい。そして、防災リュックなども準備しておくというそうだ。自分自身は被害にあってなくても、いつ、なにが、どこで土砂災害が起こるか分らない。だからこそ、万全な対策で、今ある素敵な日常を大切に過ごしていきたい。



令和3年度土砂災害防止に関する絵画

国土交通大臣賞

【小学生の部】



中種子町立油久小学校3年 東園晃太郎さん
「早めのひなでみんなの命を守ろう」

国土交通事務次官賞

【小学生の部】



霧島市立天降川小学校5年 野崎健太さん
「暗くなる前に早めの避難」

国土交通事務次官賞

【中学生の部】



（２）その他の活動

■県政広報テレビ番組

県では、梅雨期前に、県の土砂災害防止に関する施策の紹介や土砂災害から身を守るためのポイントを解説する等により、県民の土砂災害防止に関する理解と関心を深め、早期避難の重要性の啓発を行うことを目的として、県砂防課職員がK T Sの県政広報番組に出演し、広報を行いました。

- 1 番組名 前原竜二の前向きチャンネル（K T S鹿児島テレビ放送）
- 2 テーマ 土砂災害から身を守るために
- 3 放送時間 令和3年5月1日（土）午後5時25分～5時30分

「土砂災害から身を守るために」



【番組制作・掲載許諾：KTS鹿児島テレビ放送】

鹿児島県は、県土の大半がシラス等の特殊土壌に覆われています。また、全国有数の多雨地帯に位置することから、例年、梅雨前線や台風による豪雨時を中心に土砂災害が多発しています。

番組では、近年の土砂災害の発生状況や県が取り組む施策、土砂災害から身を守るために大切なことなどを紹介します。是非、ご覧ください。

（出典：KTS鹿児島テレビ放送ホームページ）

■「県政かわら版」の全戸配布

梅雨期前に、県民向けの防災情報を掲載した「県政かわら版」を発行し、県内の各家庭に全戸配付しています。

（右）「県政かわら版」令和3年6月号

